

循環型ビジネスモデル「ヨシモデル」が 切りひらく新しい産業のかたち

淀川の河川敷に広がる「鵜殿(うどの)のヨシ」と出会い、地域資源をいかしたデザインや商品づくりを続ける株式会社アトリエMay。越前和紙や竹紙などを使った製品を販売する中、独自製法で「ヨシの繊維化」に成功した。環境にやさしい新素材として、多様な可能性を切りひらいている。

ヨシ原の保全活動を継続しつつ、循環型ビジネスモデル「ヨシモデル」を全国のヨシ原へ展開し、持続可能な産業の輪を広げることを目指している。親子二人で運営する小さな会社ながら、企業や自治体からの注目を集め、令和4年度には大阪府「おおさか環境賞 大賞」、令和5年度に環境省「地域環境美化功績者表彰」を受けた。その挑戦は、地域資源の未来を支える確かな成果へと向かっている。

株式会社アトリエMay
代表取締役 **塩田 真由美**
株式会社アトリエMay
デザイナー **塩田 菜津子**
INPIT大阪府知財総合支援窓口
支援担当者 **大野 健造**
INPIT窓口機能強化事業事務局
統括担当者 **後藤 昌彦**



INPIT大阪府知財総合支援窓口(加速的支援)を知った／利用したきっかけ

もともとは、他社から依頼された仕事の関係で、知財に関する相談を行うため、INPIT大阪府知財総合支援窓口(以下、「知財窓口」という)を訪ね、支援担当者とお会いした。また、支援担当者とは、北大阪商工会議所のイベントでも顔を合わせていた。その後、当社は「ヨシ」を活用した事業に進出した。そして、特許庁が参加希望事業者・個人を募集している、知財を活用して社会課題を解決する人々を支援する「I-OPEN PROJECT」に応募し、採択された。そこで当社を担当した弁護士が「このプロジェクトだけで終わるのはもったいない」との想いから、令和5年4月に知財窓口につなぎ、I-OPEN PROJECTの成果や今後のビジネスの方向性などを共有した。その後、加速的支援計画書の作成及びその承認を経て、令和5年9月から支援が開始された。

(左から) 後藤氏、塩田菜津子氏、塩田社長、大野氏

 アトリエ May
yoshi design



株式会社アトリエMay

所在地：大阪府枚方市宗谷 1-11-13
事業内容：ヨシ繊維製造及びヨシ糸・ヨシ紙
企画販売 / デザイン / イベント企
画・運営 / 小売業 / ヨシ製品の
OEM
従業員：3名
創業：平成19年
資本金：300万円
URL：https://www.art-may.jp/

ビジネスモデルの転換

デザイン事務所がヨシ繊維製造へ
「ヨシ繊維」の開発の経緯について
教えてください。

塩田社長：私は平成19年に和紙のミニギャラリーとカフェを開き、そこで鵜殿ヨシ原研究所の小山弘道先生と出会いました。先生は「産業として成り立たなければヨシ原は続かない」と危機感を持ち、ヨシ紙を紹介してくださいました。私は地元産のヨシに興味を持ち、紙全般を扱うギャラリーを本格的に始めることにしました。

平成24年には大阪高島屋でヨシ紙の照明などを展示・販売し、商品企画を本格化しました。その後、メディアにも取り上げられるようになり、ヨシ紙の価値が広く認められるようになりました。こうした活動の中で「ヨシ繊維」を開発しました。ヨシを繊維化しコット

支援を受けた製品

ヨシ繊維 ヨシモデル

ヨシは古くから生活資材や筆簞(ひちりき、雅楽で使用される竹製の管楽器)の蘆舌(ろぜつ、リードにあたる)として使われてきました。鶉殿ヨシ原の保全活動を続けながら、独自の方法で繊維を抽出し、コットンとの混紡糸を製造しています。ヨシ繊維は抗菌性や消臭効果をいかにせる環境にやさしい素材です。現在は企業と連携し、照明やインテリア、ファッションなど幅広い分野に応用。こうした取組を通じて、独自のビジネスモデル「ヨシモデル」を全国に展開し、環境保全と産業振興の両立を目指しています。



ヨシ糸と、ヨシ繊維を使用した製品

ヨシ繊維の製造を担っていたいただきました。さらに、加速的支援にも参画をお願いし、製造上の課題解決に貢献いただきました。大野：加速的支援の開始前には、淀川ブランド協議会の名称を「ヨシオープンイノベーション協議会」

へ変更すること、及びこれに伴う契約手続について支援しました。その後は、ヨシの繊維化に関する特許権の取得に向けた取組から、ライセンスビジネスにつながる知財戦略の検討まで、段階を追って着実に支援しました。

加速的支援を受け、会社はどのように変化しましたか。

塩田社長：加速的支援において特許権

と混ぜた「ヨシ糸」は汎用性の高い素材です。そして、令和3年にヨシ繊維工場を設立しました。しかし、コロナ禍による売上減少と機械導入の負担が重なり、赤字が続きました。もともと小さなデザイン事務所から繊維製造へ転換したため、負担は大きかったです。それでも、令和5年からINPITの加速的支援を受けたことで今期は黒字化を達成しました。支援の成果を実感しています。



塩田(菜)：当社はもともと商品企画や販売を行っていたため、素材を繊維化して販売することに抵抗はなく、ヨシ糸づくりに挑戦しました。たとえ世の中の関心が薄れても、自ら刈り取って繊維化すれば、ライフワークとして続けられると考えています。その姿を「面白い」と感じてくれる人が現れるかもしれないし、課題に挑戦すること自体に魅力があるとも感じています。

刈り取りから商品化まで

「ヨシモデル」を日本各地へ加速的支援はどのように行われましたか。

後藤：私が強く感じたのは、塩田社長のヨシに対する強い情熱と行動力です。加速的支援の期間中には、社長は思ったことを次々に実行され、月1回の支援のたびに状況がいい方向へ大きく変化しました。そのため、私たちが後を追うような場面もありました。一方で菜津子さんは、従来の事業で



ある「他社にデザインやブランドデザインを提供する業務」も継続したいと考えておられました。これらを両立させ、ヨシ繊維の製造との相乗効果を高めるための仕組みを、どのように構築するかが課題でした。

その結果、アトリエMay独自の「ヨシモデル」が構築されました。これは、ヨシを刈り取り、繊維化して商品化し、全国へ展開する仕組みであり、前例のない事業モデルです。また、日本新聞インキ株式会社(NISSIN)様の協力も大きく、特許権のライセンス供与を通じて、ヨシ繊維の製造を担っ

鶉殿のヨシ刈り取り作業



日本新聞インキ社のヨシ繊維製造工場



主な知財

特許権

葦微細繊維と、その紡績糸、および不織布(第7576833号)、葦繊維の製造方法(第7583486号)

商標権

一紙温一／しおん(登録第5883323号)、reed yarn(登録第6373968号)

加速的支援項目

- 1 ヨシを活用した独自のビジネスモデル「ヨシモデル」を構築
- 2 ヨシの繊維化技術の特許等取得と活用を見据えた知財戦略を構築
- 3 ヨシを活用した製品のマーケティング戦略立案・ノウハウ管理方針の明確化
- 4 各地のキーパーソンや協力企業等との連携を実行するための社内体制を整備

活用専門家

中小企業診断士、弁理士、ブランド専門家



INPIT関係者とのミーティング

「小さな企業だからこそ知財戦略が重

塩田社長：加速的支援を受けたことで、

含めて事業を引き継いでいきたい」という菜津子さんの想いを踏まえ、社長と菜津子さんの役割を整理・明確化しながら支援を行いました。

また、将来的に菜津子さんへ事業を承継するという社長のお考えと、「もともととの強みであったデザイン企画も含めて事業を引き継いでいきたい」という菜津子さんの想いを踏まえ、社長と菜津子さんの役割を整理・明確化しながら支援を行いました。

の取得に関する助言をいただき、大きな自信につながりました。事業継承についても専門家の助言で整理が進み、デザイナーの菜津子へのバトンタッチの道筋が明確になったことは、大きな成果です。WEBサイトのリニューアルも実施し、生産を日本新聞インキ株式会社さんに任せられる体制も整ったことで、会社の方向性はつきりしました。知財や仕組みを残すことにより、将来、菜津子が事業を承継しても継続できる基盤ができたと感じています。

塩田(菜)：事業内容が明確になったことで、企業からの問合せが増えました。さらに、大手企業からヨシ活用の企画に関する相談も寄せられており、大阪・関西万博でも内装材や床材に採用されるなど、関心が広がっています。

塩田社長：自治体からの問合せも多く、主にSDGs関連の内容です。子ども向けの出前授業に加え、大手建設会社との連携も進んでいます。万博では自然環境がテーマとなり、琵琶湖や淀川

水系のヨシが注目されました。私たちも「必ず万博に出る」という目標を持ち続けてきましたが、それを実現できたことは大きな喜びです。

大野：生産を移管できたことで、菜津子さんがデザインだけでなく商品企画にも注力できる体制が整いました。これにより「ヨシをどういかにするか」という本来の課題に集中できるようになり、製品展開を広げる仕組みが整いつつあります。

不安を解消した伴走型支援 オンリーワンの事業を後押し

「加速的支援の前後で意識はどのように変化しましたか。」

塩田社長：当初は、数字を細かく指摘される経営診断のようなものかと不安に感じていました。しかし実際には、当社の強みを丁寧に見極め、それを伸ばしながら、特許権の取得をはじめとする具体的な課題解決に向けて伴走

的な支援を受けることができました。弁理士の助言を得ながら、抗菌性を失うことなく加工できるヨシ製品の製造方法や、その技術を用いた製品について内容を精査・充実させ、特許化を実現できたことは大きな成果です。また、これまでライセンス料を支払って使用していた、ヨシの繊維化に関する関連特許についても、権利譲渡を受けることで当社独自の特許とし、ヨシ事業における知財ポートフォリオを構築することができました。こうした支援を通じて当初の不安は払拭され、支援を受けて本当に良かったと感じています。

塩田(菜)：私には別の懸念がありました。当社のヨシ製品の製造業としての事業を引き継ぐだけでなく、これまで培ってきたデザイン・企画の事業についても、次世代へと継承していきたいという要望がありました。加速的支援が製造業の事業継承を目的とするのであれば、受ける意義はないかと考えていました。しかし、実際は異なりま



した。ヨシというニッチな分野に取り組んできたことで、大企業や工業の方々とつながる機会が増え、意見を直接伺えるようになったことは大きな成果でした。

後藤：支援の初期段階では、塩田社長から「とっつきにくい」「面倒ではないか」といった率直なお声をいただきました。その点は真摯に受け止め、チーム内で相談を重ねながら、課題に応じたビジネスモデルづくりや、専門家を交えたWEBサイト改修などを実施しました。社長と菜津子さん、それぞれのお考えを丁寧に確認しながら支援を進めることを常に意識していました。



「知財窓口を利用する人にアドバイスをお願いします。」

**会話から本質的な課題も指摘
小さな会社にとって大きな力に**

塩田(菜)：事業の悩みや課題は、一言では説明しきれない場合もあると思います。しかし、そうした内容も雑談のような対話の中でも整理されていきます。私は当初、知財の複雑さだけが課題であると考えていましたが、より本

要だ」と以前にも増して強く感じるようになりました。また、『ヨシ』でインターネット検索をして当社を見つけた大企業が訪問してくださることもあり、オンラインワンの事業に挑戦する意義を改めて実感しました。

INPITはコンサルティングではなく、伴走しながら支援し、専門家にすぎつつ課題を共に考えてくれる姿勢に救われました。さらに、菜津子の妊娠・出産の時期にまでご配慮いただき、大きな力をもらいました。



質的な課題を指摘していただけたことが、大きな収穫でした。気軽に対話する中で悩みが整理され、新たな気づきが得られることが、INPITの支援であると感じています。

塩田社長：「めんどくさいを、めんどくさがらない」「人と争わないために丁寧に向き合うこと」が大切だと感じています。加速的支援では話を真摯に受け止めていただき、信頼関係の重要性を改めて実感しました。ヨシ原と一緒に足を運び、シンポジウムにも参加してくださった姿勢から、仲間意識も一層強まりました。

小さな会社でも日々「右か左か」と決断を迫られ、契約には不安が伴います。大企業とのやり取りには怖さや不安もあります。信頼できる方々に支えられたことで、安心感が生まれました。知財窓口を訪ねることは小さな会社にとって大きな力になると感じています。

また、INPITの皆さんは、何でも気軽に相談できる存在であり、外部の支援者というより、特別な社内役員

のような存在です。心強さと感謝の気持ちでいっぱいです。

大野：支援担当者は、知財に限らずオールマイティである必要があります。知財以外のビジネス面の支援も極めて重要であり、最終的には企業が着実に利益を上げられるよう支援することが一番大事だと思います。

特許等の知財を活用し、ビジネスとして利益につながる道筋、すなわち知財戦略を構築できたかどうか重要です。今回の支援により、その流れを一定程度形にできたことは、本当に良かったと思います。

後藤：知財は、大手企業から仕事を受注したり、対等に交渉したりするための大きな武器になると、改めて感じました。知財やライセンスを活用した「ヨシモデル」を全国に広げていける可能性は、非常に大きいと思っています。

塩田社長：大手企業の若手建築設計士の方々と、ヨシ事業の今後について話し合ったところ、「最終形はヨシオープンイノベーションセンターだ」とい

加速的支援を受けての効果

- ◎ヨシの繊維化に関する特許権を取得、会社の方向性が明確化し、ビジネスモデルが確立した。
- ◎展示会への出展やホームページの改修等により、企業、自治体からの問合せが増えた。
- ◎日本新聞インキ株式会社と契約し、生産体制が確立した。
- ◎将来の事業継承の基盤ができた。

う考えにたどり着きました。さらに複数の設計士の方が「実現を一緒に考えたい」と賛同してくれており、次の目標が明確になりました。

塩田(菜)：私も、次世代へヨシ事業をつなぐため「ヨシオープンイノベーションセンター」を実現したいと考えています。そこは、来訪者がヨシ事業を学び、地元を持ち帰って実行できる場になりたいと思います。そのためにも「ヨシといえばこれ」といえる代表的な商品を生み出すことが、アトリエMayの当面の目標です。

- 塩田 真由美 Mayumi Shiota
- 平成19年 紙のギャラリーを創業
 - 平成26年 ショールーム兼オフィス移転 株式会社アトリエMay設立
 - 令和3年 一般社団法人淀川ブランド協議会設立 理事に就任 交野市私市にて、ヨシ繊維製造工場スタート
 - 令和5年 淀川ブランド協議会改め一般社団法人ヨシオープンイノベーション協議会 代表理事に就任

知財は ここから。

